

SCAN

'85 Autumn

第10回ビデオアート公募入選作品発表展

SCAN'85は、新鋭による日本の新しいビデオアート作品の選抜展です。広く全国から作品を公募し、毎年新しい選考委員2名を迎えて選考されます。この公募シリーズを通してSCANは、多様なジャンルから出来るだけ多くの秀れたビデオアート作品を世に出していきたいと願っています。入選作品はビデオ・ギャラリーSCANにて公開ののち、世界各地のビデオ展・フェスティバルへ日本を代表して送られます。

期間 11月22日(金)～11月24日(日)
11月29日(金)～12月1日(日)

時間 (金・土曜) 4PM 7PM
(日 曜) 2PM 5PM

会場 ビデオギャラリーSCAN

主催 ビデオギャラリーSCAN

協力 ソニー株式会社

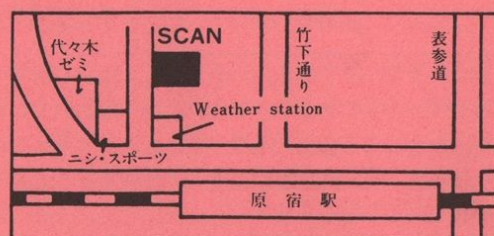
日本ビクター株式会社

住友スリーエム株式会社

ビデオギャラリーSCAN
渋谷区神宮前1-21-1
phone 03-470-2664

VIDEO GALLERY SCAN

1-21-1 JINGU-MAE SHIBUYA-KU TOKYO 150



SCAN '85 autumn

＜中島 興……………SCAN '85 autumn



中島 興
Ko Nakajima

『心の内部』へカメラを……

今回はあまりおもしろい作品はありませんでした。なんだか観て「お・む・く」になってしまいました。ヒーローと来る作品がなかったようです。それとも審査にあたった小生の「め」がふし穴で作品を見る「眼」がなかったのかも知れません。少々、全体的に作りが雑です。しかし、大西氏の作品は見えない部分である「音」を聞く部分が大変おもしろく、みえない映像に「興味」を持ちました。何んでもない夏の夜の1日の中に音でみせようとする「音の力」がきわめてビデオ的（日常）でスーとぬけるようでした。30男のやりきれないコンセプトが感じられました。佐々木氏の作品はアイデア賞的でしたが、少々、島野氏の系列に属しますが、島野氏もどちらかと言えばウィッチー・バスルーカの系列に属しますので、この2人はバスルーカの観せきに入るアーティストだと思いませんか？ これも小生の一方的なひとごとかも知れません……。

土佐さんの作品は素材を何回もくりかえして使っているところが気に入りまして、彼女の作品は大ざっぱで「わしつかみ」のところがあり「映像に力」があり興味のもてる作家の一人です。九州の女性アーティストにはどうしてナイーブで繊細なところがないのでしょうか？ それは地形風土の性でしょうか？ いやいや、ひたすら力でおしまくるパワーが九州女性アーティストの心意気かも知れません。

最後に多寡氏の作品は音楽的エディティングが何人も言葉を超えており、文字で書けないのが残念です。まわりや、あたりを気にせずにひたすら長期にわたって作品を作り続けられることを作家の1人としてお慕ひいたします。

コンスタントに作品を作り続ける。これはビデオ表現運動をねざす国際的なきずなのような気がするのですが……いかがでしょうか？ 表現運動なしにはビデオアートは存在しないようすが……!! 出品者の皆さま、もう少々、「心の内部」へカメラを向けたいかがでしょうか？ 大西氏の電気の消えた音だけの映像の中にそのヒントがあるような気がします。

コメント ●作家N.中島 興 M.森岡祥倫

入選 SCAN '85 autumn プログラム

佐々木成明

Naruaki Sasaki

Toller Pole 1985 Color 7min

●中心としての私 振りまわされる環境としてのアナタ、もしくは三脚としての私とカメラとしてのアナタによる視覚の冒険。

N. これはまた天才的なビデオ作家と思いましたが!! 少々、島野君を思わせるのか気になります。そうおろさないで下さい。島野氏よりははるかに天才です。と、まあ次なる作品に取り組んで下さい。作ったものとかやく言うのはやめましょう。傑作中の大傑作であるのはまちがいないのです。天才はカメラをのぞかないのです。

M. “映像の天地左右”は必ずしも自然界の摂理をそのまま受け入れるとはかきらない。このテーマは、多くの独創的な写真作品や実験映画の中で検証されてきた。ビデオアートにおいても、例えば島野義孝の作品がそのよい先例となっているが、佐々木さんの作品は、その装置のアイデアにおいて最もユニークで、かつまた視覚的な効果において最もダイナミックな体験を見る者に与える。

多寡 克也

Katsuya Taka

DENO 1982-85 Color 1min30sec

LAST FEEL 1984-85 Color 5min

ワタシノアナタ 1985 Color 1min40sec

●向こうから“来る”ときは、できて、来ないときは、できません。頭の上に“線”ができればできあがり 待つてもよしうがれないから、ポチ、ポチ、歩いてみます。

●「作家は、スランプになると、死んでそのことを解決しようと思うものです」と購入したので ワツシ その手があつたのかと喜びましたものおれは、作家なんかじゃないので、関係ないワイ。生き動かしちゃつとるワイ。アホー。

●お姉さんがかわいかったので、女の子、男の子、いっしょに遊んでしまった、ワタクシでした。お姉さんとSEXでできませんでした。残念です。

N. バイロン、ブラックを先生にいたたく、大阪のビデオアーティストの出現です。おもしろい「つけもの」をたべている、バリバリした映像がなんとも歯にしみて、頭の裏をシゲキするのです。傑作中の大傑作、バリバリ「おしんこ」の映像美をごらん下さい。バチバチバチ

M. ビデオアーティストとして最も若い世代に属する多寡さんの作品には、音楽（自作か？）の扱いにせよ特殊効果の扱いにせよ、「ビデオアート風」の気背いゆえなくない。それにしても、小供たちの日常をとらえたこのインサートは何だろう、この8ミリ映像は何だろう。作者のパーソナリティに触れるこれらの断片的な映像に、次の世代の新鮮な感覚が感ぜられる。

SCAN '85 autumn

の選考を終えて……………森岡祥倫＞



森岡 祥倫
Toshimoto Morioka

くビデオを取り巻く環境として今必要なもの

今回のエントリー作品は57本、一人で6-7本を応募している人もいるが、おそらく過去最高の数であろう。そのため前回は比較すると様々なスタイルが見取れるのだが、個々の作家のビデオグラフィからみてもやはり突出した作品は少なかった。

SCANの作品公募が、巷に乱立する多くのビデオコンテストと一線を画しているのは、選ばれた作品と作者に権威の手で張子の冠を押し頂かせるのではなく、世界各地のビデオ展からの要請に応じて入選者をディストリビュートするという、ビデオ・メディア本来の役割を当初から機能させてきたからに他ならない。入選者はその場かぎりの“勝者”ではなく、日本を代表する作品として不断に新たな評価を受け続ける……そうした視点から従前の選考たちは審査を行ってきたはずである。その結果と云うべきが、今回もまた入選作はわずかな数に絞られてしまった。理由は前回のリフレットに標した通り、状況に変化はない。重複は避け、ここでは、作家や観客や評論を取り巻く環境として今なにか不足しているのか、今後のSCANへの期待も含めて、私なりの枯淡な意見を述べさせていただきます。

①新しい作家の出現、新しい作品の露出を促す“場”の必要性。その意味でこの公募展の存在価値は今後も大きい

②特定の作家の活動を俯瞰できる個展形式の発表会は、観客の興味を喚起しやすく、またジャーナリズムや評論にと

っては作家論の前提となる貴重な資料を提供してくれる。相応のキャリアを持つ作家に、個展の機会をもっと与え

るべきではないか。

③ビデオ・パフォーマンスやインスタレーションなど、パッケージ・メディアとしてのビデオの境界を越えようとする

表現形式の発表の場があまりにも少ない。新たな回路を作っていく必要がある。

④ビデオ・ライブラリーの不足。単に量（作品数）の問題だけでなく、作家のレファレンス視聴、評論家・ジャーナ

リストの研究にも供せるような運営ノウハウ構築の可能性がそろそろ問題にされてよい。ビデオアートに関するベ

ンチックな研究や評論がこの間に育たない原因のひとつでもあるので、各地の大学や美術館のライブラリーでもリ

ンクした方法を早い時期に見つけ出したものだ。

⑤一般のビデオ雑誌ではともすればハードウェア情報や市販ソフト情報の中に埋もれがちな国内外のビデオアート関

連情報をも、広く詳しく作家や観客に伝える専門媒体＝ペーパー・メディアが必要である（カナダやアメリカ、フラ

ンスにはその種のものが数紙、誌ある）

以上思いつくままに挙げた。資金、資力の限界を理由とする断念や現状は認りたくないのは、それらの“欠如”

を欠如として自覚せずとも作品が生産されてしまうその見せかけの豊かである。

土佐 尚子

Naoko Tosa

Trip 1985 Color 7min

depth psychology
深層心理

●無意識の世界。深層心理の境地で見ている人の、はりつめた神経をゆるめてしまう。

N. いやいや、九州女性のおしつかみの映像のダイナミックさを喜びました。ドバーツと無神経なところがいいのです。美味じ!! なんと土佐さんの映像は「味つけなし」の美味じビジュアル・イメージです。それは、それでよかったです!!

M. 同一の映像素材が一連の作品の中で中々新しい編集・加工を受け変代していく手法は、バイクの常套であるが、土佐さんも同様の姿勢を数本の作品の中で取り続けてきた。しかしここでは「AN EXPRESSION」や「アーキチャー」などから受け継がれた写真素材や幾何パターンが、原形の面影をほとんどとどめない美しい映像のテクニクに姿を変えている。

大西みつぐ

Mitsugu Ohnishi

ビデオのある普通の暮し 眠れぬ夜 1985 Color 30min

●夏の夜、眠れぬ夜だったのでビデオを持ちました。NEW・ファミリービデオ（ニューファミリーではありません）Vol.2

N. これも今回の傑作の一つです。大西君は太陽賞を受賞した、写真家です。彼のワンダーランド・シリーズとくらべると少々個人的すぎますが、夏の夜一日、なんと30男の静けさが出ました。作者のパーソナリティに触れるこれらの断片的な映像に、次の世代の新鮮な感覚が感ぜられる。

M. この作者にとってのビデオは、深遠な理念やコンセプトへ到るためのアートの道具でもなければ、個人や家族のプライベートを記憶に沈黙、下降する日常記録の道具でもなく、むしろ“家具”の在りように限られている。文字通りのホーム・ビデオのスタイルをとりながら、ホーム・ビデオ自体へのすぐれた批判・分析となっている。そして、「聞のかたち」を細かい音の糸で織り取る術をみてほしい。